

# 西トップ遺跡北祠堂偽扉の調査

## —釈迦如来立像に関する検討—

### 1 北祠堂調査の概要

西トップ遺跡では、中央祠堂・南祠堂・北祠堂の三祠堂群とその前面に張り出す仏教テラスとが、ラテライト石列で囲われるように配置されている。20世紀初頭のフランス極東学院による遺跡発見時には、三祠堂群に樹木が繁茂していたため、クリーニング作業をおこなったという記録が残されている<sup>1)</sup>。北祠堂は、躯体部、上成基壇、下成基壇で構成され、躯体部南面と西面には、それぞれ偽扉が存在し、一体ずつ釈迦如来立像が彫り込まれている様子が、フランス極東学院の古写真に残されていた。偽扉とは躯体部の扉部分が開口せず、閉塞されている部分を指す。しかし、樹木繁茂、基壇の不等沈下等が原因で躯体部は北面と東面がほぼ完全に倒壊しており、創建当初の様相を知ることができなかった。

フランス極東学院の調査から80年以上の時を経て、奈文研が西トップ遺跡における調査を開始した2004年、古写真に残されていた北祠堂躯体部南面と西面の偽扉の釈迦如来立像は当時の状況をとどめておらず、膝下の脚部だけ原位置を保っている状態であった。その後の調査により、西面偽扉にある釈迦如来立像の上半身部分は、シェムリアップ市内にあるアンコール遺跡保存事務所に保管されていることが判明したが、南面の釈迦如来立像の上半身部分は倒壊により散乱石材の中に散逸していた。そのため、北祠堂再構築にあたっては、発見時に既に倒壊していた東面・北面の復元に加え、南面偽扉部分の釈迦如来立像の復元が必要不可欠であった。

**北祠堂偽扉復元** 2017年度、北祠堂修復調査にさきがけ、フランス極東学院により遺跡北側に雑然と置かれていた散乱石材の整理作業をおこなった。全石材の図面、番号付け作業をおこなった後、1000を超える石材の中から、北祠堂の構成部材を抽出し、復元作業へと取り掛かった。復元作業の結果、散逸していた南面偽扉釈迦如来立像の膝より上部のすべての部材を発見し、復元に成功した（図17）。

一方、アンコール保存事務所に保管されていた西面偽扉釈迦如来立像の膝部以上の部材は、カンボジア文化芸



図17 北祠堂偽扉南面偽扉釈迦如来立像

術省立会いのもと、無事に西トップ遺跡へ返還された（図18）。そして、完全倒壊していた北面偽扉の釈迦如来立像に関しては、1材を除きすべての部材を北側散乱石材から発見することができた。残った1材の尊顔部分は、中央祠堂主室内に安置されていた。これにより、北祠堂は開口部である東面を除く3面すべての偽扉釈迦如来立像が復元されることとなった。

### 2 北祠堂偽扉仏陀立像の特徴

北祠堂偽扉南面・西面の両釈迦如来立像は共に右手を胸前で施無畏印を表し、左手は体部側面に添えている。片但右肩で、足は両つま先を左側へ向けていることから、わずかに腰をひねる表現をしているとみられる。顔貌は、伏目で、微かに口角を上げた厚い唇、ふっくらとした鼻の表現はバイヨン様式を引き継ぐ面相を表す。しかし、眉頭が繋がり額と肉髻の間に一条の段が入る点、肉髻の上に火焔形の頂飾が載る点は、バイヨン期より下ったポスト・バイヨン期（13～15世紀中頃）を示す。一方、今回新たに復元された北面偽扉釈迦如来立像は、顔貌、肉髻、袈裟、印相すべてが南面・西面と同じ特徴を有するが、胴部以下は異なる様相を示す（図19）。体躯を右方向にひねり、膝をやや右方向に曲げ、両つま先は右方向へと向き、踵はあきらかに上げて表現されている。これはいわゆる遊行仏（Walking Buddha）の特徴といえる。しかし、遊行仏はスコータイ王朝期（1236～1438）において独自に発展した様式で、かつてアンコール王朝領内



図18 北祠堂西面偽扉釈迦如来立像

または他地域から遊行仏が発見されたことはない。

### 3 北祠堂の年代観の検討

**上座仏教の導入** 現在のタイ北部スコータイ地方で隆盛したスコータイ王朝は、当地を治めていたクメールによる支配が弱体化した13世紀初頭頃に興隆した。スコータイではクメール語が公用語として使われていた点などから、アンコール王朝との影響関係が指摘されていた<sup>2)</sup>。碑文史料によると、スコータイでは13世紀初頭にはセイロンから上座仏教を受容したと言われる<sup>3)</sup>。

一方、アンコールにおいて上座仏教を受容した時期について、具体的な文字資料は残されていない。ただし、元の使節に同行した周達觀が1296年から97年にアンコールに滞在した際に残した『真臘風土記』には、「苧姑（僧たる者）は髪を削り黄（衣）をきて、右肩を偏袒（はだぬぎ）する」とあり<sup>4)</sup>、これが上座仏教僧であると考えられる。また、上座仏教で使用されるパーリ語を用いた碑文が初めて確認されるのは1307年であることから<sup>5)</sup>、少なくとも13世紀末から14世紀初頭には既にアンコールにおいて上座仏教が受容されていたことが推定される。

**出土炭化物年代の検討** ここで、西トップ遺跡北祠堂の建立年代について考えてみたい。北祠堂地下で発見されたレンガ遺構最下層出土炭化物6点について東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に加速器質量分析装置(AMS)を用いた放射性炭素同位体比分析を依頼した。較正年代(2SD)がおよそ14世紀初頭から15世紀前



図19 北祠堂北面偽扉釈迦如来立像

葉におさまる値を示すことが判明した<sup>6)</sup>。施工方法からみても、北祠堂偽扉に表された3体の釈迦如来立像は後世に改変されたものではなく、建立当初のものと考えられることから、釈迦如来立像も14世紀初頭から15世紀前葉を中心とした年代に当てはめられる。

つまり、西トップ遺跡北祠堂は上座仏教がアンコールに伝来し受容されたと推定される時期に建立されたと考えられる。セイロンからアンコールに至る上座仏教伝來の経路は未だわかつていない。しかしながら、北祠堂に彫り込まれたスコータイ様式に類似した遊行仏を含めた偽扉の釈迦如来立像の存在は、アンコール王朝末期における上座仏教に関して新たな資料を提供することができたと考えられる。

（佐藤由似・杉山 洋）

#### 註

- 1) Marchal, Henri, Notes sur le monument 486 d'Angkor Thom, Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient, Tome 25 (3-4), 1925.
- 2) 吉川利治「スコータイに対するクメールの影響－遺跡と刻文に関する分析－」『カンボジアの文化復興 (26)』上智大学アジア人材養成研究センター、2010。
- 3) 石井米雄「国家と宗教にかんする一考察 (III) : スコータイにおける大寺派上座部仏教の需要をめぐる諸問題」『東南アジア研究』9 (1)、京都大学東南アジア研究センター、1971。
- 4) 周達觀著、和田久徳訳『真臘風土記』平凡社、1989。
- 5) George Coedès, La plus ancienne inscription en pāli du Cambodge, B.E.F.E.O. tome 36, 1936.
- 6) 奈文研『西トップ遺跡 調査修復 中間報告5 北祠堂レンガ遺構編』2018。